

韓国人日本語学習者の格助詞の習得に関する研究

著者	内山 潤
雑誌名	言語科学論集
巻	6
ページ	37-48
発行年	2002-11-20
URL	http://hdl.handle.net/10097/30741

韓国人日本語学習者の格助詞の習得に関する研究

内山 潤

キーワード：格助詞、習得、中間言語、意味役割

要旨

日本語の格助詞は、動詞によって様々な意味役割を取る。本研究では寺村(1982)の分類をもとに、格助詞と意味役割の分類を行い、それぞれがどのように習得されていくのか、韓国人学習者を対象に質問紙調査を行った。結果を場所性の有無および、起点・中立・着点という観点から分析し、(1) 場所性のある項目には、全般的に「で」を正しいとする誤用が見られる (2) 起点・中立・着点として見た場合、起点の項目が最も難しい(3) 対象の「に」は習得が進むにつれてむしろ誤用が増えるの3点を明らかにした。

0. はじめに

第二言語学習者は、目標言語を習得していく過程で、目標言語の母語話者であれば不適格であるとみなすような、さまざまな文を生成する。1960年代には、不適格な文・誤用文の生成に関しては、構造言語学の理論に基づいた対照研究が主流であった。学習者の誤用は母語の干渉によるものであり、母語と目標言語の対象研究によって予測・解消できるという考え方に基づいて研究が進められていた。

しかし、Corder(1971)は、学習者の誤用に関する研究を進めて、1)どんなに注意深く指導を行っても、誤用は必ず生じること、2) 母語に関係なくどんな学習者にも生じる共通の誤用がむしろ多いこと、などを明らかにした。1970年代にSelinker(1972)によって中間言語の概念が提唱され、誤用は習得の中間段階において学習者の持つ固有の言語体系により生じるものであるという考え方が主流になってきている。

中間言語の研究には、複数の文法項目を取りあげて、それらの習得順序や習得過程を明らかにするものが出ている。本論文はこのような研究の一つとして、文法項目に日本語の格助詞を取り上げ、その習得過程を明らかにしようとするものである。

1. 研究の目的

日本語の格助詞を扱った習得研究としては、いくつかの先行研究が存在する。

上井・吉岡(1990)では、Johnston(1985), Pieneman & Johnston(1987)の第二言語習得モデルを基にして、「は・が(主体)、が(対象)、を(対象)」の4つの項目を取り上げ、その習得順序を調べている。「『が』と『を』を正しく使用する学習者は必ず『は』も正しく使用するが、『は』を正しく使用する学習者が必ずしも『が』と『を』を正しく使用するとは限らない」という仮説である。被験者は、ハワイ大学マノア校で日本語を学習中の、レベルの異なる3つのクラスの学習者各8名ずつ、計24名である。調査は、インデックスカードに英語で書かれた簡単な質問に日本語で答えるという形式で行われた。

上井・吉岡(1990)はこの発話を書き起こしたものから、全体の中の格助詞の正用数を正用数と誤用数の合計で割った正用率を、それぞれの被験者・項目ごとに求めた。分析の結果、「が」または「を」が使える(正用率が0ではない)にもかかわらず、「は」が使えない(正用率が0である)被験者が存在しなかったことから、仮説は検証されたとしている。また、仮説には存在しなかったが、「が」は使えるが「を」は使えない被験者は存在しなかったため、「を」と「が」の間にも何らかの必然的な習得の順序が存在する可能性についても言及している。

Yagi(1992)の研究では、アメリカの大学で日本語を学習している学習者を被験者として、助詞の正用順序を調査している。被験者は38名で、日本語クラスで実施されたクイズの作文部分一回分を資料としている。これらの作文について、

- a. 各助詞の正用数
- b. 各助詞が使われるべきではない場所にその助詞を使った誤用数
- c. 各助詞が使われるべき文脈の数

をそれぞれ算出して、ある助詞の正用率を[$\text{正用率} = a \div (b+c) \times 100$]として求めている。作文中に一度でも現れた格助詞、係助詞、連体助詞、接続助詞を全て扱っているため、項目は全部で29項目である。この29項目について区間推定を行い、95%の信頼区間の幅が20%を超えるものについては考察の対象から外している。最終的に分析の対象となった項目は格助詞「に」「が」「を」、接続助詞「が」「から」、係助詞「は」、連体助詞「の」の計7項目である。

これらの7項目について、Yagi(1992)は、算出された正用率と、95%の信頼区間の幅から[接続助詞「が」「から」 > 「に」「は」 > 格助詞の「が」]という正用順序を求めた。「の」「を」の2項目については信頼性区間が重なるため「の」

については「が・から」「に・は」のいずれかのグループに入り、「を」については「に・は」「が」のいずれかのグループに入るとしている。

これらの研究を概観すると、以下のような共通の問題点が挙げられる。

1. 分析の対象とした助詞が全ての助詞をカバーしていない
2. 同じ格助詞が異なる意味役割で用いられることへの配慮が不十分である

1 について、これらの研究では、データに発話や作文などの学習者の生成物を用いているために、一定の項目について一定の量のデータを得ることが事実上不可能であるということが原因である。また、Yagi(1992)の研究のように接続助詞と格助詞のような性質の異なるもの同士の比較が、格助詞同士のよう同一のカテゴリに属するもの同士の比較と同じように扱えるかは疑問である。2 については、1 と同じ原因に属するものであるが、例えば「本を読む」の「を」と「公園を散歩する」の「を」のように、意味役割の異なるものを、同じ「を」として扱うことができるかという問題である。¹⁾

以上のことを考慮して、本研究では、それぞれの格助詞の形態だけではなく、その意味役割にも着目して、項目を選定する。それぞれの項目について、生成ではなく、学習者の受容あるいは文法性判断について、客観的に正誤判断が可能な質問紙を用いてデータを集める。その結果を、場所性の有無と移動に関する起点・中立・着点の組み合わせで、6つのカテゴリを用いて分析する。これまで生成を中心に明らかにされてきた中間言語の性質が、受容あるいは文法性判断についても成り立つのか、学習者の習得がどのように進んでいくのかを検証することを目的とする。

2. 研究の方法

2.1. 項目の分類

本研究では、調査の基盤となる格助詞－意味役割の分類として、寺村(1982)の分類を用いた。寺村(1982)では、「日本語の述語を、それがどういう種類の補語を必要とし、それぞれの補語がどういう格助詞を取るかという観点」から分類している。まず、文の中の補語を「あるコトの表現において、言い換えればある述語にとって、それがなければそのコトの描写が不完全であると感じられるような補語」＝ 必須補語と、「そうでないもの」＝ 副次補語という風に大きく二つに分類している。その上で、述語がどのような意味役割成分を必須補語としてとり、それぞれの必須補語をマークする格助詞が何であるかという観点から、動詞、形容

詞、決定詞を含めて、日本語の述語類を全部で 30 の類型に分類している。

本研究ではこの類型から、動詞を述語とするもののみを取り出した。さらに、意味役割と格助詞の分類を中心に再構成し、以下の 13 項目を抽出した。

- | | |
|--------------|-------------|
| (1)動作主の「が」 | (2)対象の「を」 |
| (3)対象の「に」 | (4)相手の「と」 |
| (5)起点の「を」 | (6)場所の「を」 |
| (7)目標の「に」 | (8)場所の「に」 a |
| (9)結果の「に」 | (10)受け手の「に」 |
| (11)与え手の「に」 | (12)誘因の「に」 |
| (13)場所の「に」 b | |

場所の「に」 a は寺村(1982)における「泊まる」動きに対応するもので、b は「物理的存在」に対応するものである。a が移動に関して、弱いながらも着点的性格を持つのに対して、b は移動に関しては完全に中立であることから、2 つに分けた。

2.2. 質問紙の作成

2.1 で分類した 13 項目について、それぞれの習得の状態を調べるための質問紙を作成した。まず、各項目について例文を各 5 文ずつ作成する。例文に使用する動詞は、国立国語研究所(1982)『日本語教育基本語彙七種比較対照表』²⁾から、得点 30 点以上の基本語彙として一致度の高いものを用い、学生が動詞の意味を知らないことに起因する間違いに配慮した。

次に、5 つの例文について、対象となる補語をマークする格助詞を削除した。それを、必須補語として使われる格助詞に、副次補語の中で使用頻度の高い「で」を加えて、「が・を・に・と・で」に置き換えた。それぞれの意味役割について、もとの格助詞と同じもので置き換えられた正用文 1 文と、異なる格助詞に置き換えられた誤用文 4 文ができあがる。13 の意味役割全部で 65 文になるが、正用文：誤用文の比率が 1:4 と著しく偏るため、単純な正用文を 35 文加えて計 100 文とし、正誤の比率がほぼ 1:1 になるようにした。なお、助詞「から」も必須補語として使われることがあるが、他の助詞を「から」で置き換えたものが正用文になってしまうことが多いため、今回は除外した。

この 100 文をランダムに並べ替えて、調査対象となる補語成分に下線を引き、下線部分が正しい場合には○を、正しくない場合には×を付けさせる形式の質問

紙とした。なお、例文の表記は漢字かな混じりとして、漢字部分にはすべてふりがなをつけた。また、フェイスシートおよび教示については、韓国語の訳を作成し、母語で読めるように配慮した。

作成した質問紙について、妥当性を検証するために、日本人2名に試行を行った。結果は、回答時間5分程度で、正答率100%と問題のないことが検証できた。

2.3. 調査の概要

実際の調査は1995年11月13日から27日の間に、韓国語を母語とする日本語学習者を対象に行った。被験者のレベルは問題文の理解に問題のない程度の日本語能力という観点から、中級とした。また、インプットの影響を考慮して、調査は複数の機関で行うこととした。各教育機関ごとの被調査者の内訳を以下に示す。表中、東北大学・筑波大学はそれぞれの留学生センター、全北大学は日語日文学科、プロフィットは民間の日本語学校にそれぞれ協力してもらい集めたデータ、国際交流会館は、東北大学の留学生施設である国際交流会館で個別にお願いして集めた件数を示す。

表1 機関別の被験者の内訳

単位:%

東北大学	筑波大学	プロフィット	全北大学	国際交流会館	計
7%(5)	9%(6)	12%(12)	68%(46)	4%(3)	100%(68)

実際の調査に際しては、学習者の日本語レベルを計るためのレベル分けテストもおこなった。被調査者の総数は、68名である。³⁾

3. 結果の分析

まず、被調査者の回答の比率を全体として見て、その傾向を分析する。次に、プレースメントテストによって分けられた、上位群、下位群の結果を分析しながら、全体の分析から見た傾向がどのように変化していくかを見ていく。

3.1. 助詞・意味役割ごとの結果の分析

各問題について、その文を正しいと判定した被調査者の比率を表に示す。

それぞれの意味役割について、正用となる助詞は、下線で示す。表中の数値は、刺激文が正用である下線部は正答率、それ以外は100との差が正答率である。

これらの比率について、その分布が、正規分布 $N(P, P(1-P)/n)$ に近似的に従うことから、95%の信頼区間を求めて検討を行った。この近似は、 $nP \geq 5$ かつ、 $n(1-P) \geq 5$ が条件となるため、比率 0.1(10%)以下、および 0.9(90%)以上のものについては、この計算は行っていない。この条件について、正しいと判断した被験者の比率が 10%以下で信頼性区間が計算できなかったものは全て誤用、90%以上のものは全て正用であった。このためこれらは問題のない項目として扱うこととした。

表 2 各問題文を「正しい」と判定した被調査者の比率

n=68, 単位 %

	が	を	に	で	と
動作主の「が」	<u>93</u>	0	6	15	0
対象の「を」	3	<u>99</u>	3	1	0
対象の「に」	3	28	<u>53</u>	7	4
相手の「と」	4	4	15	0	<u>97</u>
起点の「を」	3	<u>35</u>	37	21	1
場所の「を」	3	<u>96</u>	13	40	1
目標の「に」	3	1	<u>97</u>	21	9
場所の「に」 a	12	0	<u>78</u>	18	4
結果の「に」	10	10	<u>91</u>	51	24
受け手の「に」	6	6	<u>96</u>	7	7
与え手の「に」	3	0	<u>88</u>	3	1
誘引の「に」	3	0	<u>68</u>	69	6
場所の「に」 b	3	0	<u>90</u>	29	0

表 3 に、各項目毎の、正用・誤用の問題点を示す。基準として、正用文については、正しい文と判定した比率が 90%を超えていれば問題なしとした。誤用文については、正しいと判定した比率の信頼性区間の下限が 10%を超えるものを中心に見ていくこととし、表中下線で示した。

以上の結果について、場所性の有無、および、起点・中立・着点という概念を用いて、考察を行う。それぞれの項目について、場所性があるものを場所性+、ないものを場所性-として表記する。なお、与え手の「に」、受け手の「に」については、他が 2 項の例文になるのに対し、3 項の例文であることが結果に影響したことが考えられるため、分析から除外した。

表3 項目毎の区間推定の結果

単位 %

項目	正用	誤用
動作主の「が」	問題なし	「で」: 6<P<23
対象の「を」(－ 中)	問題なし	問題なし
対象の「に」(－ 中)	41<P<65	<u>「を」: 17<P<39</u>
相手の「と」	問題なし	「に」: 6<P<23
起点の「を」(+ 起)	24<P<47	<u>「に」: 25<P<48</u> <u>「で」: 11<P<30</u>
場所の「を」(+ 中)	問題なし	<u>「で」: 28<P<52</u> 「に」: 5<P<21
目標の「に」(+ 着)	問題なし	<u>「で」: 11<P<30</u>
場所の「に」a(+ 中)	68<P<88	「で」: 8<P<27 「が」: 4<P<20
結果の「に」(－ 着)	問題なし	<u>「で」: 39<P<64</u> <u>「と」: 13<P<34</u>
受け手の「に」	問題なし	問題なし
与え手の「に」	80<P<96	問題なし
誘引の「に」(－ 起)	56<P<79	<u>「で」: 56<P<79</u>
場所の「に」b	問題なし	<u>「で」: 18<P<40</u>

まず、場所性+で、起点のものとしては、起点の「を」が挙げられる。これは、正用の「を」を正しいと判定した比率が低く、誤用「に」を正しいと判定した比率とほぼ同じである。また、誤用「で」を正しいと判定した比率も、上記2つの比率よりやや低いものの、信頼性区間はわずかに重なっている。このカテゴリについては、「に」に傾く傾向が強く、「で」に傾く傾向もあると言えよう。

次に、場所性+で、中立のものは、場所の「を」、場所の「に」a、場所の「に」bの三つがある。この内、場所の「を」と場所の「に」bについては、正用を正しいと判定した比率が高く、問題ない。また、誤用「で」を正しいとした比率はいずれも信頼性区間の下限が10%を越えている。ここから、このカテゴリについては、「で」に傾く傾向がある。場所の「に」aについては、正用を正しいと判定した比率もやや低く、「で」を正しいと判定した比率も低めである。

場所性+で、着点のものとしては、目標の「に」がある。正用を正しいと判定した比率は高く、問題はない。同時に、誤用の「で」を正しいと判定した比率も、やや高くなっている。ここからこのカテゴリについても、「で」に傾く傾向があることがわかる。

以上を通してみると、場所性が+となる全てのカテゴリについて、誤用「で」を正しいと判定した比率が、一定程度存在していることが分かる。場所の「を」と場所の「に」b をのぞき、信頼性区間も一部重なっており、ほぼ同程度の比率である可能性もある。また、起点については「に」に傾く傾向が強く、中立、着点の場合は場所の「に」a を除けば、正用を正しいと判定した比率には問題がないことが分かる。

次に、場所性-となるものについてみていく。場所性-で起点となるのは、誘引の「に」である。これは、正用を正しいと判定した比率がやや低くなっている。また、誤用「で」を正しいと判定した比率が、正用を正しいと判定した比率とほぼ同じとなっている。ここから、このカテゴリについては、「で」に傾く傾向が強いといえる。

場所性-で中立となるものは、対象の「を」と対象の「に」である。対象の「を」については、正用を正しいと判定した比率も高く、誤用についても問題ない。対象の「に」については、正用を正しいと判定した比率が低く、誤用「を」を正しいと判定した比率がやや高くなっている。ここから、このカテゴリについては、「を」に傾く傾向が強いと考えられる。

最後に、場所性-で着点となるものは、結果の「に」である。これは正用を正しいと判定した比率は高く、問題ない。しかし、同時に誤用「で」を正しいと判定した比率も高くなっている。また、「で」よりは低いものの、誤用「と」を正用と判定した比率も高い。ここから、このカテゴリは「で」と「と」に傾く傾向が強いと考えられる。

3.2. 上位群・下位群の考察

プレースメントテストの結果から、学習者の上位18名、下位17名を抽出して、その比率を比較し、それぞれのカテゴリがどのように習得されていくのかについて考察する。表4に、各問題について、上位群・下位群の正しいと判定した比率を示す。

表4 上位群・下位群の「正しい」と判定した比率

単位: %

	上位群(n=18)					下位群(n=17)				
	が	を	に	で	と	が	を	に	で	と
動作主の「が」	100	0	0	6	0	82	0	6	24	0
対象の「を」	0	100	6	0	0	0	100	6	6	0
対象の「に」	0	17	33	6	17	0	53	71	0	0
相手の「と」	0	0	11	0	100	6	12	18	0	100
起点の「を」	0	44	6	6	0	18	41	41	12	0
場所の「を」	0	100	0	33	0	6	100	6	47	0
目標の「に」	0	0	100	6	0	6	6	94	35	12
場所の「に」 a	17	0	72	6	6	18	0	71	41	0
結果の「に」	11	11	94	39	28	12	6	94	53	18
受け手の「に」	6	11	100	0	6	6	6	100	18	12
与え手の「に」	6	0	83	0	0	0	0	88	6	6
誘引の「に」	0	0	72	50	6	12	0	71	82	6
場所の「に」 b	0	0	100	11	0	6	0	82	59	0

まず、場所性+、起点である起点の「を」については、正答である「を」を正しいと判定した比率は、上位群下位群ともほとんど差がない。しかし、誤用「に」や「で」を正しいと判定した比率は上位群の方が低くなっており、上位群においてはこの問題はほぼ解消されている。

次に、場所性+、中立である場所の「を」、場所の「に」 a、場所「に」 b、であるが、いずれも誤用「で」を正しいと判定した比率は上位群の方が低い。正答を正しいと判定した比率は、場所の「を」については下位群でも高いために差がない。場所の「に」 b については下位群はやや低めで、上位群の方が高い。しかし、場所の「に」 a については場所の「に」 b よりも低いにも関わらず上位群・下位群の間に差がない。

場所性+、着点である目標の「に」については、正用を正しいと判定した比率は、わずかながら上位群の方が高くなっている。また、誤用「で」を正しいと判定した比率も上位群の方が低い。

場所性-、起点である誘引の「に」については正用を正しいと判定した比率にはほぼ差がなく、上位群でもやや低い。しかし、誤用「で」を正しいと判定した

比率は上位群の方が大幅に低くなっている。

場所性－、中立である対象の「を」と「に」であるが、対象の「を」については、正用・誤用ともほとんど差がなく、上位群・下位群とも問題がない。対象の「に」については正用を正しいと判定した比率は上位群の方がむしろ低くなっている。しかし、誤用「を」を正しいと判定した比率も上位群の方が低い。

最後に場所性－、着点である結果の「に」については、正用を正しいと判断した比率は上位群、下位群とも高く問題がない。しかし、誤用「で」を正しいと判定した比率は、上位群の方が低くなっている。

以上をまとめると以下のようなことが考えられる。まず、場所性＋の項目について見られる誤用「で」を正しいと判定する傾向は、いずれも上位群の方が比率が低い。習得が進むにつれて徐々に解消されていくと見なすことができる。

次に、起点の項目は、場所性＋でも－でも、正用を正しいと判定した比率が低く、上位群・下位群との間での差も見られなかった。誤用を正しいと判定した比率は習得が進むにつれて減るものの、習得の難しいカテゴリであると言える。

中立の項目については、場所性＋でも－でも正用を正しいと判定したものが多い。特に場所性＋の場合、「に」「を」のいずれも正しい判定を下しているものがあり、一つのカテゴリで複数の助詞の使い分けがきちんと分化していることも観察できる。しかし、場所性－の対象の「に」については、上位群でも正用を正しいと判定した比率がもっとも低かった。

最後に着点の項目については、場所性＋－とも正用を正しいと判定した比率は下位群でも高い。しかし、下位群では誤用「で」を正しいと判定した比率が高いのに対し、上位群では低くなっている。

3.3. まとめと考察

以上の結果に基づいて、中間言語の性質について考察を行う。まず、場所性＋のカテゴリで見られた、誤用「で」を正しいと判断する傾向であるが、これは正用を正しいと判断した比率が90%を超える項目にも現れている。これは、一人の学習者が、同じ項目について複数の助詞の使用を許容していることを示している。この傾向は、上位群では弱くなるものの、完全には解消されていない。ここから、生成を中心にした研究で主張されている、「習得は一時に進むのではなく、正用と誤用を併用する期間があって、徐々に誤用が減っていく」という中間言語の性質が、受容あるいは文法性判断についても成立することが分かる。

次に、起点・中立・着点を比較する。場所性の有無に関わらず、起点の項目は正用を正しいと判定した比率が低かった。池上(1981)では、起点と到達点という概念が、論理的には全く対等なものであるにも関わらず、実際の言語への表れとしては圧倒的に到達点の方に傾斜していることが述べられている。「起点」をマークする典型的な格助詞である「から」を実験の性質上扱っていないため断定はできないが、今回の結果は上記のような言語一般に当てはまる性質が、中間言語でも成立することを反映しているとも考えられる。

最後に、中立の項目に現れた結果について考察する。場所の「を」および対象の「に」はいずれも非典型的な使われ方であるといえる。格助詞「を」は典型的には場所性－中立の対象の意味で使われるものであるが、場所の「を」では場所性＋の中立の意味で使われている。格助詞「に」は、典型的には場所性＋の中立または着点の意味で用いられるが、対象の「に」では場所性－の中立の意味で用いられている。両者は共に非典型的で、対照的な関係にあるが、結果には大きな違いが見られた。まず、場所の「を」に関しては、誤用「で」を正しいとした比率が高いものの、正用を正しいとした比率は下位群でも高い。しかし、対象の「に」は、正用を正しいとした比率が低く、上位群では下位群よりもむしろ低くなっている。混同の原因と考えられる対象の「を」については、下位群でも十分に正答率が高いにもかかわらず、習得がさらに進むにつれて、過剰般化が起こるとも考えられる。同じく非典型的な項目と考えられる場所の「を」と対象の「に」について、異なる結果となった原因には、中間言語の何らかの性質が反映されている可能性がある。

以上、本研究では、客観的に集計可能な質問紙を用いて、韓国人学習者を対象に、格助詞の習得に関する調査を行った。その結果を分析して、

- (1) 場所性のある項目には、全般的に「で」を正しいとする誤用が見られる
- (2) 起点・中立・着点として見た場合、起点の項目が最も難しい
- (3) 対象の「に」は習得が進むにつれてむしろ誤用が増える

の3点を明らかにした。しかし、(2)について、起点を表す格助詞「から」との関係がどうなっているのか、(3)について、同様に中立で非典型的な項目である場所の「を」についてはなぜ違った結果になったのかについては、更なる調査が必要である。今後の課題としたい。

査データをに、新たな分析と考察を付け加えたものである。

[注]

- 1) 八木(1996)は、本研究の1995年の調査後に出版されたものであるが、機能別の分析も試みている。しかし、作文を資料としているために、各助詞の機能について十分な量のデータにはならず、機能グループとして分析している。
- 2) 国立国語研究所(1982)は日本語の語彙について、日本語教育学・国語学・言語学の専門家計22名に、基本語彙として適当であるかどうかを判定させ、それを得点化したものである。得点は1点から40点までで、10点以上が上位6000語、25点以上が上位2000語に相当する。
- 3) 調査では中国人学習者についても29名分のデータを収集したが、紙幅の都合上今回は扱わないこととした。

<参考文献>

- Corder, S. P. (1971) 'Idiosyncratic Dialects and Error Analysis' *IRAL Vol.9 No.2*
- Selinker, L. (1972) 'Interlanguage' *IRAL, Vol.10 No.3*
- Yagi, K. (1992) 'The Accuracy Order of Japanese Particles'
- 『世界の日本語教育 第2号』 国際交流基金 日本語国際センター
- コーダー, S. P.(1988) 『中間言語入門 誤答分析を超えて』 三修社
- 池上 嘉彦(1981) 『「する」と「なる」の言語学』 大修館書店
- 国立国語研究所(1982) 『日本語教育基本語彙七種類比較対照表』 大蔵省印刷局
- 渋谷 勝己(1988) 「中間言語の現状」 『日本語教育 64号』 日本語教育学会
- 寺村 秀夫(1982) 『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』 くろしお出版
- 土井 利幸・吉岡 薫(1990) 「助詞の習得における言語運用上の制約--ピーネマン・ジョンストンモデルの日本語習得研究への応用」 *Proceedings of 1st Conference on Second Language Learning* The International University of Japan
- 八木 公子(1996) 「初級学習者の作文にみられる日本語の助詞の正用順序：
助詞別、助詞の機能別、機能グループ別に」 『世界の日本語教育 第6号』
国際交流基金 日本語国際センター